

学祭の秋、リアルに活気



3年ぶり対面開催した県立大の「剣祭」。一般公開し、学内は活気づいた
＝10月29日、静岡市駿河区

3年ぶり一般公開

大学祭シーズンを迎えた県内の大学は今年、新型コロナウイルス禍前の形態で3年ぶりに一般公開し、活気づいている。コロナ禍で中止やオンライン開催を余儀なくされた学生たちは、市民との交流を楽しみながら「リアル」の良さを体感している。

県内対面交流に「感動」

「想像以上の人が来場してくれた。学生が頑張る姿や来場者が楽しんでいる様子に感動する」。静岡市駿河区の県立大の「剣(つるぎ)祭」実行委員長平田隆

晟さん(21)は10月29日、にぎわう学内を見渡して3年ぶりの対面開催について感慨深げに語った。一昨年は中止、昨年はオンラインでの開催だった。

生徒たちは模擬店で楽しそうに飲食物を販売し、屋外ステージや講堂では各団体がダンスや楽器演奏など日頃の活動の成果を披露した。講堂の入場制限や飲食スペースの指定など、できる限りのコロナ対策を施した。

対面開催に向け、学生は大学側へ申し出を行ったという。平田さんは「今年は何としてもやりたい思いが強かった。来場者の前で活動発表をしたいという学生の声も多かった」と話す。

もし今年も対面開催が見送りとすれば、来年は本来の学祭を知る学生が学内にいなくなる危機感もあった。大学側も「久しぶりにやらせてあげたい」と、感染対策との折り合いをつけて可能な形を探った。

今月6日まで、静岡、浜松の各市キャンパスで順次開催している常葉大。昨年は来場対象を学生と家族に

限定し、オンラインと併用したが、今年は来場対象を一般市民にも広げて事前予約制とし、模擬店も復活させた。

5、6の両日に3年ぶりに対面開催する浜松市中央区の静岡文化芸術大は、従来のように近隣小学校の児童

を招待し、地域団体の展示を行うなど地域連携にこだわった。実行委員長の3年生堀池佑菜さん(20)は「碧風(へきふう)祭らしきの一つが地域交流。感染対策の中で、できる範囲で取り組みたい」と意欲を示した。

(社会部・佐野由香利)